

## 蒲生慶一さんをしのぶ

相馬 保夫  
SOMA Yasuo

東京外国語大学名誉教授  
Tokyo University of Foreign Studies, Professor Emeritus

*Quadrante*, No.24 (2022), p.16.

蒲生さんは、私より一回り以上若く大柄でそのそと歩きながらいつも澁刺としていた。よく話すようになったのは、いつ頃のことだったか。

蒲生さんとは外国語学部地域国際講座が国際社会学部に編成替えされるここ十数年、同じ部署にいた。その割に知り合いになったのは、案外最近のことだったような気がする。急に親しみがわいたのはおそらく、出身の高校が同じで、私の実家がある茅ヶ崎から毎日大学に通っていることをお聞きしてからだ。海外事情研究所という共通のスペースはあったものの、そこで講座会議が開かれなくなってから、蒲生さんをお見かけするのは教授会のある日くらいになった。思いがけず蒲生さんと雑談するようになったのは、同好の士が集まる場が設けられてからだった。

多くは大学の話についてであったが、蒲生さんははととも良い聞き手だったように覚えている。自分から話題を提供することよりも、私や同じ高校出身のKさんの独りよがりを巧みに受け流し、コメントしてくれていたような気がする。私が退職してから大学を時おり訪れた時にも、なぜかよく蒲生さんと出会い、最近ではよく自分の病気の話をしていて、刻々と悪くなっていくなかでも、蒲生さんは天性の明るさと前向きな姿勢で乗り越えていたように見えた。それでも学生指導には私などよりは何十倍も熱心に取り組み、そして情に熱かった。彼は病に負

けない、気の優しい鉄人ではないかと思った。最後に会ったのは、亡くなる前の1月か2月のことだ。まったくいつもと変わらず、茅ヶ崎から2時間かけて大学に来ていと話していた。今でもキャンパスのどこかから元気な蒲生さんがひょっこり現れるような気がする。無念だがこういう人と外語大で知り合えたことは、私にとって一生の宝である。